

# 学内での留学生と日本人学生の交流を目指した短期留学プログラムの開発

\* 高橋 亜紀子・\*\* 加山 裕子

Developing a Short-term Exchange Program for International Exchange  
Between Japanese and Short-term International Students on Campus

TAKAHASHI Akiko and KAYAMA Yuhko

## 要 旨

日本国内では、グローバル化が進んでおり、学校現場も例外ではない。宮城教育大学では、グローバル化に対応できる教員を育てるために、海外経験を持つ学生を全体の2割にすることを目指しているが、実際には海外に行く機会がない学生のほうが圧倒的に多い。そこで、短期間であっても海外からの留学生を受け入れることで、日本人学生に留学生と学内で交流する機会を提供したいと考え、短期留学プログラムの開発を試みた。本稿では、本プログラムの概要と参加者及び日本人学生ボランティアからの評価をもとに、本プログラムの意義について検討した。

**Key words :** 短期留学プログラム (Short-term Exchange Program)

グローバル化 (Globalization)

留学生 (International Students)

日本人学生 (Japanese Students)

学生交流 (Student Exchange)

## 1. はじめに

近年、日本国内のグローバル化が進み、学校現場もその例外ではない。平成32年度には、小学校では英語が教科化される。また、文部科学省の平成28年度の調査によると、日本語指導が必要な児童生徒が初めて4万人を超えた。学校では、国際結婚の家庭や外国籍の家庭などの子どもも増えており、多様な国籍や文化を背景とする児童生徒が学んでいる。今後さらにグローバル化が進んでいくことは間違いないであろう。

宮城教育大学では、教員自身がグローバルな視野や具体的なスキルを持つ必要があるとの認識に立った教員養成を行うことを目標とし、実践力強化に向け、1～2週間程度の海外研修のコースを設け、海外経験

を持つ学部卒業生を2割(約80名)程度にするという計画を立てている。

教育キャリア研究機構・国際理解分野(旧国際理解教育研究センター)では、大学の目標を達成するため、海外研修を担当するほか、学校現場での国際理解教育、多文化共生教育、国際交流、外国籍児童生徒支援など、学生の興味・関心及び理解が促進するように多文化理解に関連する講義を出講している。また、学内のグローバル化を進めるため、留学生と日本人学生が交流する機会も積極的に提供してきた。

しかし、海外への短期研修の参加者は平成26年度には79名であったが、テロ等の影響により、平成29年度は39名となっている。このほかにも、長期・短期の留学プログラムを設けているが、留学を選択する学生は

---

\* 宮城教育大学

\*\* マントバ大学(カナダ)

ごくわずかである。

また、本学の留学生数は平成23年度には100名近くであったが、平成30年度には20名程度にまで落ち込んでいる。その理由として、平成19年度以降、いわゆるゼロ免課程の廃止により、学部留学生の入学者が減少したことが挙げられる。また、平成23年3月に発生した東日本大震災の影響により、国際交流協定を締結している大学からの交換留学生も減っている。

本学では卒業生に占める教員就職率75%を目標としており、学部留学生数の増加は今後も見込めない。そこで、震災以降に、国際交流協定校を4校増やし、交換留学生を一定数確保している。しかし、今後も留学生を増やすことは難しい。

以上、本学では、海外研修に参加する日本人学生を増やすことが課題である。しかし、海外への送り出しには送り出し国の治安や家庭の経済状況などの要因も影響するため、簡単には解決できない問題である。そこで、留学生を増やすことによって、学内のグローバル化をより進め、日本人学生に留学生と学内で交流する場を提供することを検討することにした。海外からの留学生を短期間であっても一定数受け入れることで、本学の留学生数を一時的ではあるが増やすことができる。また、短期間であれば国際交流協定校としての交流がない国や地域からの留学生を受け入れることもできる。特に、本学ではほとんど受け入れがたい英語圏からの留学生を受け入れることができれば、日本人学生に留学生と英語で交流する機会も創出できる。

## 2. 短期留学プログラムの設立までの経緯

海外では、日本語学習者が平成27年(2015年)の段階で360万人以上おり、その数は年々増加している(国際交流基金、2015)。最近の傾向では、海外の学生の海外留学のニーズ全体が長期間から短期間のものへとシフトしてきている(鳥崎、2018)。こうした状況も踏まえ、平成25年から、海外の大学で日本語教育を担当している複数の教員に呼びかけ、短期プログラムに参加してもらえるように交渉を続けてきた。その結果、カナダのマニトバ大学からサマーコースとしての開講を検討してもらえることになった。

翌年(平成26年)から、カナダのマニトバ大学は、サマーコースとして本学の短期プログラムの学生募集

を始めた。しかし、参加者が十分集まらないため、実施することができない期間が数年続いた。しかし、プログラム実現を目指し、マニトバ大学と本学の担当教員、内容や期間などについての検討を続けた。当初の計画ではコースは2週間(3単位)であったが、3週間(6単位)のほうが参加者が集まりやすいだろうと考え、期間を延長することにした。その結果、2017年(平成29年)の募集で、学生7名が集まり、実施することに決まった。ここでいう単位とは、本学が認定するものではなく、マニトバ大学がサマーコースの単位として認定するものである。

## 3. プログラム

### 3.1. 期間

プログラムの実施期間は2017年5月13日～6月3日の3週間である。

### 3.2. 参加者

参加者はカナダのマニトバ大学で日本語を学んでいる7名である。詳細は表1に示す。

表1 参加者の詳細

参加者	学年	性別	国籍	日本語学習期間
1	2	女	中国	2年
2	2	女	中国	2年
3	2	女	中国	2年
4	1	男	カナダ	1年
5	1	女	中国	1年
6	1	女	カナダ	1年
7	1	男	イギリス	1年

### 3.3. 目的

本学で短期プログラムを実施する目的は、本学の学生に留学生と交流する機会をできるだけ多く提供することである。また、マニトバ大学側の目的は、参加者が日本語と日本文化に関する授業を通して、日本語によるコミュニケーション能力を高め、日本人学生を含む多くの日本人と交流しながら、日本への理解を深めることである。

### 3.4. 内容

プログラムの内容は、マニトバ大学が希望する日本語3単位と日本文化3単位を組み込んだものとした。参加者は、日本語学習歴が1年のものが4名、2年のものが3名である。マニトバ大学では、1年生が『初級にほんごげんきⅠ』の第1～9課まで、2年生が『初級にほんごげんきⅡ』の第10～19課まで学習している。1年生と2年生では日本語の能力が異なるが、予算の都合上、クラスを2つに分けることができないため、7名全員が同じクラスで授業を受けることになった。

今回は3週間という短い期間であり、日本語能力を大きく高めることは難しい。そこで、これまでに学んできた日本語を使う機会を提供する、特に、日本でしかできない体験してもらい、その体験の場で日本語が使えるようになることを目指す体験中心のデザインにした。また、日本語でコミュニケーションがとれたという自信をもって、日本語学習を帰国後にも継続してもらえるようにという点にも配慮した。

具体的な内容は、(1) 日本語、(2) 体験活動、(3) 大学の授業への参加、(4) ボランティア学生との交流の4つを組みこんだプログラムとした。

なお、授業の授業時間数は、マニトバ大学における単位認定時間数に合わせ、本学の規定によって決めた。

プログラムの詳細は、次ページの表2に示す。

1週目は大学や仙台での生活に慣れてもらうように、キャンパスツアー、仙台市内の見学(青葉城址や博物館)、仙台あおば祭りへの参加などの活動を取り入れた。

2週目は大学の図書館と共同で「カナダを知ろう」というイベントを企画し、日本人の学生にカナダやカナダの大学について知ってもらう活動を取り入れた。また、仙台市内の小学校を訪問し、子どもたちとの交流を予定に入れた。週末には、東日本大震災の被災地(気仙沼)を訪問し、住民からそば打ちを学び、語り部から被災地の現状を聞き、日本の家庭で一泊のホームステイを行う活動を取り入れた。ホームステイは、本学に在籍する交換留学生とともに参加する形式とし、1家庭に2～4名の留学生がホームステイした。マニトバ大学の学生が日本語でのコミュニケーションに困っている場合には、本学の留学生が手伝うこととした。本プログラムでは小学生や地域の住民など、あ

らゆる世代の日本人とコミュニケーションをとることも日本語学習において重要だと考えて計画した。

3週目は図書館で「カナダを知ろう」の2回目のイベントを企画した。マニトバ大学では、サマーコースの「日本文化」の課題として、日本の文化や習慣で面白い・不思議だと思ったことをトピックにし、日本人に日本語でアンケートを取り、その結果をレポートにまとめることを課している。そこで、この課題をイベントで発表してもらうことにした。また、日本での様々な体験スピーチをボランティア学生に聞いてもらう機会も設けた。最後には修了式(学長表敬訪問)や送別会などの計画も立てた。

表2 プログラムの詳細

日		内容							
1日目	5月13日 土	1コマ (9:00 ~ 10:30)	2コマ (10:30 ~ 12:00)	昼休み (12:00 ~ 13:00)	3コマ (13:00 ~ 14:30)	4コマ (14:40 ~ 16:10)	5コマ (16:20 ~ 17:50)	宿泊先	
2日目	5月14日 日	仙台空港到着 (11:05) 旅館移動・オリエンテーション・市内案内 (学生ボランティア)							旅館
3日目	5月15日 月	東北大学国際祭り見学/仙台ハーブマラソン見学など (学生ボランティア)							旅館
4日目	5月16日 火	日本語授業① (ブレイクタイムテスト)	ウェルカムランチパーティー	授業参加①	自由行動	学生交流 (キャンパスツアー)		旅館	
5日目	5月17日 水	日本語授業②	ランチ (学食)	体験活動 (茶道・和菓子・折り紙)	自由行動	自由行動 (サークル参加など)		旅館	
6日目	5月18日 木	日本語授業③	ランチ (学食)	自由行動	体験活動 (仙台市博物館見学)			旅館	
7日目	5月19日 金	日本語授業④	ランチ (学食)	授業参加②	授業参加③	自由行動 (サークル参加など)		旅館	
8日目	5月20日 土	体験活動 (青葉城址見学)	ランチ (学食)	授業参加④	学生交流			旅館	
9日目	5月21日 日	仙台青葉祭り見学など (学生ボランティア)							旅館
10日目	5月22日 月	松島見学など (学生ボランティア)							旅館
11日目	5月23日 火	日本語授業⑤	ランチ (学食)	授業参加⑤	学生交流	自由行動 (サークル参加など)		旅館	
12日目	5月24日 水	日本語授業⑥	ランチ (学食)	学生交流	授業参加⑥			旅館	
13日目	5月25日 木	日本語授業⑦	カナダを知らう① (図書館)	ランチ (学食)	自由行動	授業参加⑦		旅館	
14日目	5月26日 金	日本語授業⑧	ランチ (学食)	授業参加⑧	授業参加⑨	自由行動 (サークル参加など)		旅館	
15日目	5月27日 土	体験活動 (小学校訪問)	ランチ (学食)	ランチ (学食)	学生交流			旅館	
16日目	5月28日 日	体験活動 (被災地訪問・ホームステイ)							ホームステイ
17日目	5月29日 月	日本語授業⑨	ランチ (学食)	授業参加⑩	マニトバ大学ゼミ	自由行動 (サークル参加など)		旅館	
18日目	5月30日 火	日本語授業⑩	ランチ (学食)	学生交流	授業参加⑪	自由行動 (サークル参加など)		旅館	
19日目	5月31日 水	日本語授業⑪	ランチ (学食)	自由行動	授業参加⑫			旅館	
20日目	6月1日 木	日本語授業⑫	ランチ (学食)	修了式 (学長訪問)	発表準備 (各自)			旅館	
21日目	6月2日 金	カナダを知らう② (図書館)	ランチ (学食)	自由行動	送別会			旅館	
22日目	6月3日 土	仙台出発							

### 3.5. 日本語授業と体験活動

日本語の授業は、プログラムに組み込んだ各週の体験活動の場において学習者が日本語でコミュニケー

ションできるようにすることを目標に内容を決めた。授業内容は表3の通りである。

表3 日本語の授業内容

週	回	学習内容	体験活動
1	1	プレイズメントテスト(文字・文法・会話)とニーズ調査	自己紹介 キャンパスツアー 学生食堂体験 仙台市博物館見学 青葉城址見学 仙台青葉まつり参加
	2	プレイズメントテストのフィードバック カタカナ学習(キャンパスツアー・学食のメニュー)	
	3	仙台・宮城についての学習 (伊達政宗、青葉城址、仙台青葉まつり、食べ物など)	
	4	日常よく使われる挨拶 短い会話練習(日本は初めて? / 初めてです。2回目です) 日常よく見る漢字(看板・サインなど)	
2	5	図書館イベント「カナダを知ろう」の発表準備 カナダまたはマニトバ大学の紹介で用いる写真を説明するスクリプトの作成と発表練習	図書館イベント1 「カナダを知ろう」 カナダ・大学の紹介  小学校の訪問  被災地(気仙沼)訪問 そばうち体験 語り部 ホームステイ
	6	小学校訪問の準備 交換留学生による発表モデルを聞く 子どもたちに紹介する内容の準備・発表練習	
	7	東日本大震災・気仙沼についての学習(震災関連の動画視聴など) ホームステイで使う日本語(訪問や食事のマナー、あいさつなど) 図書館イベント「カナダを知ろう」の事前発表練習	
	8	小学校訪問の練習(子どもたちへの質問の仕方と答え方) ホームステイのマナー(お風呂、トイレ、手伝い) 失礼にならない日本語の話し方 漢字探し(ホストファミリーの名前)	
3	9	気仙沼訪問の感想 ホストファミリーへのお礼の手紙	図書館イベント2 「カナダを知ろう」 課題の発表 日本での体験発表会 学長表敬訪問 修了式 送別会
	10	小学校訪問の感想、小学生へのお礼の手紙 日本での体験についての発表準備	
	11	日本での体験についての発表練習	
	12	日本での体験を学長に聞かれた場合の答え方 日本での体験発表会	

プレイズメントテストの結果、日本語学習歴の差はあまり見られず、参加者からは日本語で話したい、話せるようになりたいというニーズが高いことが明らかになった。そのため、授業では、様々な体験の場で日本語を使って話せるようになることに重点を置き、参加者に「できた」という達成感を感じてもらえるように指導することとした。

しかし、表1のように中国国籍の参加者が4名おり、クラスに漢字圏と非漢字圏の学習者が混在していることから、日本語クラスの運営上、やや困難な点もあった。

### 3.6. 大学授業への参加

大学授業への参加については、本学の教員に短期留学生の来日予定と講義提供の呼びかけをメールで行い、12の講義の担当者から協力を得ることができた。プログラムでは、日本語の授業を午前中に組み込んでいるため、午後の時間に大学授業への参加を割り当てることにした。参加した授業は、英会話や異文化理解講読、第二言語習得論、情報教育(プログラミング)、家庭科(調理実習)、幼児教育研究演習、人間と思想、留学生向けの日本語、大学院生の日本語教育などである。

### 3.7. ボランティア学生の募集と交流

ボランティア学生は、大学のポータルサイトを利用



して、全学生に呼びかけを行い、グーグルフォームを利用して登録を受け付けた。その結果、希望者23名が集まった。ボランティア希望者に対して、オリエンテーションを実施し、プログラムの目的や日程、ボランティアにお願いしたいことなどを十分に説明し、活動ごとに責任者を置く体制を取った。

ボランティア学生には、来仙時の出迎えのほか、仙台市内や仙台あおば祭りの案内などを依頼した。プログラムの中にも学生交流の時間を設け、大学の授業への参加では留学生と一緒に授業に参加してもらうことにした。そのほかにも、プログラムの空き時間や放課後、週末などに自由に交流できる時間も設けた。

#### 4. プログラムの評価

##### 4.1. 参加者のアンケート

プログラムの終了時に、本プログラムに関するアンケートを実施した。回答は7名全員から得た。

まず、プログラム全体の評価を聞いた。(1) このプログラム全体、(2) このプログラムが日本理解に役立ったかを「5：とてもよい」から「1：とてもわるい」までの5段階評価で聞いた。この結果を図1と図2に示す。

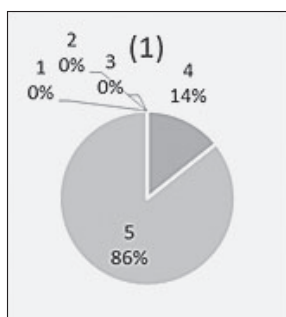


図1 (1)の結果

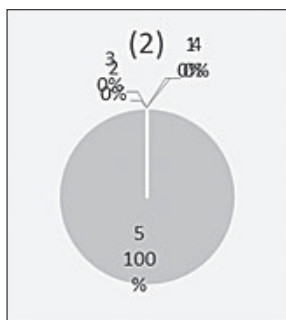


図2 (2)の結果

図1と図2から参加者の評価は「5」が最も多く、プログラムの満足度が非常に高いと言える。

次に、日本語のクラスの(3) 授業内容と(4) 練習量について5段階評価で聞いた。この結果を図3と図4に示す。

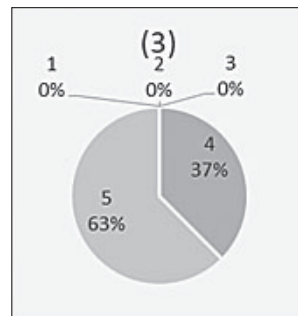


図3 (3)の回答

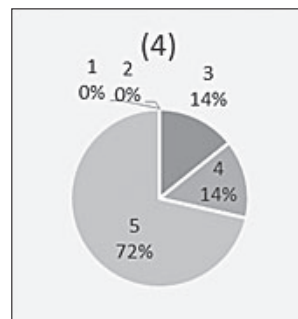


図4 (4)の回答

図3と図4ともに、「5」と評価したものが5名おり、授業内容と練習量も満足していると考えられる。

そして、プレゼンテーションが日本語学習の役に立ったかどうか、(5) 1回目(カナダとマニトバ大学の紹介)、(6) 2回目(日本の文化)について聞いた結果を図5と図6に示す。

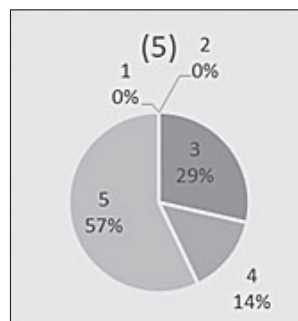


図5 (5)の結果

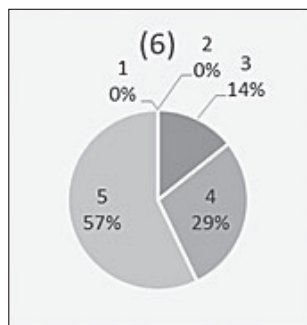


図6 (6)の結果

図5と図6より、1回目よりも2回目のほうが「5」が増えており、役に立ったと考えているようである。しかし、参加者の一部からは「プレゼンテーションが多すぎる」という意見もあった。日本語の授業担当者からは、来日前に発表の準備をしてきてもらい、それについて1週目の授業で発表する練習や質疑応答を行う時間があれば、学生の自信につながるだけでなく、教員側も学習者1人1人の日本語力を把握することができたのではないかと指摘があった。プレゼンテーションの準備や回数については、次回の課題としたい。プレゼンテーションの様子を図7に示す。



図7 プレゼンテーションの様子

プレゼンテーションには、ボランティア学生も含め、多くの日本人学生の参加があった。日本文化の発表トピックは、日本のオタク、日本の高校のシステム、日本のゴミの分別、ウォシュレット、日本のゲームセンター、日本人はどうしてマスクをつけるのか、日本人はどうして猫が好きか、であった。いずれも参加者が日本に来てから興味を持ったトピックで、日本人学生に対するアンケートやインタビューを日本語で行い、その結果をまとめたものである。日本人学生にとっ

ては、外国人の目から見た日本についての話を聞くことは新鮮で興味深く、日本や自分たちの生活を再発見するきっかけになったようである。

(7) 大学の授業への参加についての満足度の結果を図8に示す。

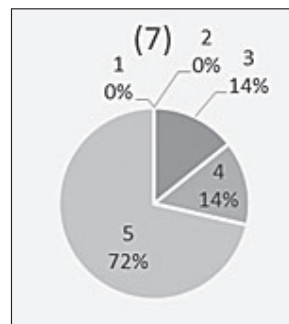


図8 (7)の結果

図8より、こちらも「5」が多く、満足度が高かった。参加者からは、「またぜひ参加したい」というコメントがあった。授業に参加している様子を図9と図10に示す。



図9 わらべうたを体験する様子



図10 調理実習に参加する様子

図9は、幼児教育研究演習の講義で、日本人学生と留学生が「わらべうた」を体験している様子である。日本人学生が留学生に歌や遊びを丁寧に説明し、お互いに楽しく学んでいる様子が見られた。

図10は、家庭科の調理実習の講義に参加した様子である。日本人学生と留学生が数名ずつの小グループで、「桜餅」と「わらび餅」の作り方、日本茶の入れ方を学んだ。料理を作りながら、日本人学生と留学生が相互に大学生活などについて話す様子が見られた。

大学以外の場所で実施した(8)小学校訪問と(9)ホームステイの結果を図11と図12に示す。

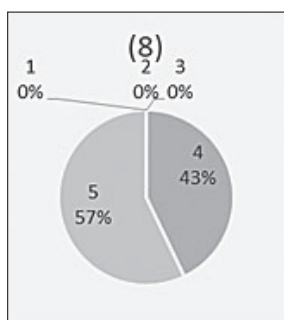


図11 (8)の結果

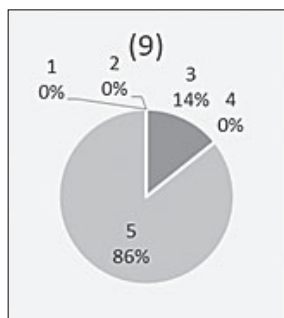


図12 (9)の結果

図11と図12より、小学校訪問、ホームステイについても「5」が多く、満足度が高いと言える。

小学校訪問は本学の交換留学生とともに参加した。留学生と日本人児童が相互に学び合えるように、留学生は自国の紹介、児童は日本の遊びや踊りの紹介を行った。活動の様子を図13と図14に示す。



図13 グループ活動の様子



図14 子どもたちから踊りを習う様子

両者が緊張しないで話せるように、7～8名の児童と留学生1名がグループで活動した(図13)。最後は全体で、留学生が児童に日本の沖縄の「エイサー」の踊り方を教えてもらい、一緒に踊った(図14)。日本の踊りは初めてであったが、参加者はとても楽しそうに踊っていた。コメントには、「小学校訪問はあっという間で、もっと子どもたちと過ごしたかった」というものもあった。

ホームステイも、本学の交換留学生とともに参加した。各家庭では、東日本大震災時の状況などを詳しく説明してもらったようだが、日本語による説明は難しく、本学の留学生が通訳することで、何とか理解できたようである。ホームステイの様子を図15に示す。





図15 ホームステイの様子

最後に、(10) ボランティア学生に対する評価を図16に示す。

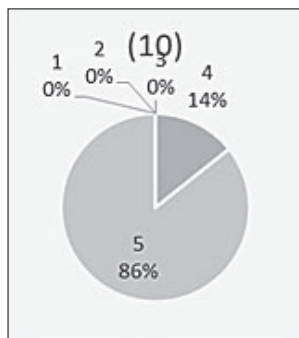


図16 (10) の結果

図16より、「5」の評価が最も多く、非常に満足度が高かった。「日本人学生はとても親切で、辛抱強かった」というコメントがあった。このコメントから、コミュニケーションなどで問題があっても、日本人学生が留学生を何とかサポートしようとしていた様子がうかがえる。

以上、ここにあげた10の質問の結果から、本プログラムに対する参加者の満足度が全般的に高いことが明らかになった。ただし、「3週間は短すぎる」「もっと自由時間が欲しい」などの意見もあったことから、プログラムの期間や内容については検討する必要がある。

#### 4.2. ボランティア学生のアンケート

ボランティア学生はプログラム開始時点で23名であったが、授業やサークル、アルバイトなどで思うように参加できないという学生が増え、実際にボランティアが継続できた学生は8～10名程度となった。

また、ボランティア責任者の学生が担当時間に来られなくなるという問題も見られた。

アンケートはプログラム終了直後ではなかったため、回答数は6名と思うように集まらなかった。ここでは実際に活動に参加した4名の回答を示す。

まず、実際にどのような活動をしたかについて聞いた。宿舎から大学までの行き方案内、市内観光、一緒に遊ぶ、日常会話の中で日本語や日本文化を教える、日本文化の紹介、研究やインタビューの手伝い、おしゃべり、などが挙げられた。

次に、ボランティアをしてよかったことについて聞いた。「みんなの楽しそうな顔が見られた」、「楽しそうにしてくれたのが何よりうれしかった」、「なかなか他国の大学生と話せる機会がないので仲良くなれてうれしかった」、「大切な友達ができた」という回答が得られた。また、「英語や異文化の勉強になった」、「日本語学習者に対して日本語を教える際の難しさや日本語のどんな所が難しいかを知ることができた」という回答もあった。ボランティア学生は、参加者と交流する中で、親しくなっていたことや参加者に楽しんでもらえるように配慮しながら活動していた様子が窺える。

最後に、ボランティアで難しかったことを聞いた。その結果、「決められた時間や人数で、全員の要望を叶えることが難しいことがあった」というボランティア運営上の問題点が挙げられた。また、「日本語を話しづらそうにしている留学生達に積極的にコミュニケーションを取りに行くことが出来なかった」、「英語を使うタイミング、彼らは日本語を勉強しに来ているので、わからない時すぐに英語で話してしまったのはよかったのかわからない」、「日本語で伝わらないとき、うまく英語で話せなかった」などのコメントがあった。ボランティア学生は日本語でサポートしようとしていたが、英語を使ってしまったことを反省しており、日本語あるいは英語のどちらで交流すべきか悩んでいたことが分かる。また、コミュニケーション上の問題があったこともうかがえる。その他に、「学務の人や先生方がどの程度関わるのか予め教えてほしかった。」という意見があった。オリエンテーションで活動の趣旨や意図を伝えたつもりではあったが、ボランティアとしてどのように関わっていいのか戸惑いを感じている学生がいたことも明らかになり、プログラム中にも

学生ボランティアに対して、教員の側の細やかなサポートがあれば、より活動しやすくなると考えられる

最後に、全員からボランティアに参加してよかったという回答が得られた。そして、「3週間通して大変貴重な経験ができたと思います。」「今後もこういった機会があれば積極的に参加したいと思います。」「途中ボランティアの参加率が悪く苦勞した部分もありましたが、留学生達にとって良い経験になったようでとても嬉しいです。」などのコメントがあり、ボランティア活動に参加した学生の満足度は高く、3週間という短い期間であっても、留学生と実際に交流することで得られる満足度が高いことが明らかになった。また、「日本にいる留学生とも交流したい」というコメントからは、学内の留学生との交流が広がるきっかけになることが期待できる。

## 5. おわりに

短期留学プログラムの開発の目的は、本学の学生にこのプログラムに参加する留学生と交流する機会をできるだけ多く提供することであった。また、マニトバ大学側では、日本語と日本文化に関する授業を通して、日本語によるコミュニケーション能力を高め、日本人学生と交流し、異文化理解を深めることが目的であった。

本学の学生には、ボランティアとして留学生と交流する機会が得られ、英語や日本語でコミュニケーションを取りながらともに活動することを通して、短い期間であっても、親しい友人を得るという貴重な経験となった。また、学内の講義に出席していた日本人学生にとっても、参加者と交流する機会がわずかでも得られたのではないだろうか。

また、参加した7名の留学生にとっては、カナダではなかなかできない、日本語や日本文化を教室以外の場でも学び、日本語でコミュニケーションをとることができた。多くの日本人学生と学内で交流する機会を得て、日本語の運用能力に自信を持ち、日本文化・習慣・日本人への理解も深まったのではないか。

本プログラムは、2年に1度の頻度で実施していく予定である。今後はより多くの日本人学生にボランティアとして積極的に関わってもらい、同世代の若者が交流できる有意義な体験の機会を提供していき

い。そのためにも、今回参加したボランティア学生の意見も取り入れながら、参加方法について検討する必要がある。また、ボランティアに頼るだけではなく、日本人学生に留学生とともに学ぶ機会を提供するために、ワークショップや合宿などをプログラムに取り入れることも有効ではないかと考える。

今回は、プログラムの実施決定の連絡が3月で、5月に実施という短い期間で準備をしなければならず、プログラムの内容について十分な検討ができなかった。短期プログラムに参加する留学生にとってもより満足度の高いプログラムとなるように、プログラム開始前にニーズを聞く機会を設けるなど、より中身の濃い、満足度の高いプログラムにしていきたい。

## 参考文献

- 加山裕子・高橋亜紀子(2018)「非日本語圏の日本語学習者のための短期留学：大学間で設立する夏季プログラム」, 2018 CAJLE Annual Conference Proceedings, 138-147.
- 金蘭美・小川誉子美・半沢千絵美(2018)「これからの短期留学プログラムの形：アンケートの結果から見えてきた課題と展望」『日本語教育方法研究会誌』, 24(2), 122-123.
- 国際交流基金(2017)『海外の日本語教育の現状 2015年度日本語教育機関調査』  
<http://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey15.html>
- 熊野七絵(2008)「大学生短期訪日研修における体験交流活動型のコースデザイン」『広島大学留学生センター紀要』, 18, 1-15.
- 島崎薫(2018)「社会とかかわり、体験し、学ぶ日本語プログラムの実践 —東北大学サマープログラムにおける試み—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』, 4, 383-396.
- 高橋志野・向井留実子・村上和弘・菅野真紀子・築地伸美(2010)「超短期日本語・日本文化研修の開発」『日本語教育方法研究会誌』, 17(1), 24-25.
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子(2011)『初級にほんごげんきⅠ』ジャパントイムズ
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子(2012)『初級にほんごげんきⅡ』ジャパントイムズ
- 松尾憲暁「短期日本語プログラム(NUSTEP)」『2015年度事業報告名古屋大学国際教育交流センター紀要』第3号, 64-67.
- 文部科学省(2017)『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成28年度)』[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/06/1386753.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1386753.htm)

(平成30年9月28日受理)